

新文学全書

夏の陰画

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十二年十月二十日発行

定価二五〇円

著者 石坂洋次郎

発行者 石渡磨須子

製版者 内田柳次郎

発行所 東京都文京区目白台一丁目七番一六号  
東方社

振替東京五七七七四番  
電話(九三)四五一七番

(印刷・邦文堂印刷所)

夏の  
陰  
画

石  
坂  
洋  
次  
郎

目次

夏の陰画

5

愛情

33

赤い鳥籠をもつ女

55

ハシカのようなもの

89

弱い種子

113

辛抱よく生きたS氏の像

129

少女

193

復讐

221





# 夏の陰画

土曜日の午後、河合のぶ子は、同僚の木村とみ子と一緒に学校から下つて来た。六月の晴れた温かい日で、住宅街の両側の生垣や庭樹には、目が覚めるような緑の色が盛り上つていた。

商店街に出るゆるい下り坂にさしかかると、右手の小路から、グレーの毛の半袖のシャツを着た教え子の大和田行雄が現われ、二人の傍に近づいて来て、ピョコンと頭を下げ、

「先生。これ——」と、ズボンのポケットから二つ折りにした手紙をとり出して、のぶ子にさしのべた。

「私に——？　なんででしょう？」

「読んで下さればわかりますから……」

行雄は、明るい屈託のない調子でそう言うのと、坂をのぼつて行きすぎてしまった。

「なんででしょう？　おかしい人ね……」と、のぶ子は行雄の後姿を見送った。

「身の上相談だわ、きつと……。貴女、男の学生達にわりと信用があるのね。あんな美少年に身の上相談をもちかけられるなんて、ちよつと羨やましいわ……」

そういうとみ子は、数学を担当しており、頭もよく親切な人柄だが、背が低く、顔が青ンぶくれていて、女の魅力には乏しかった。

「あの子、国語——というよりも、文学が好きなのだから、それで私のところに相談をもちかけたんでしよう……」

のぶ子は何気なさそうに言つたが、顔は少しばかり赤らんでいた。というのは、色が白く容姿が整っているのぶ子は、男の学生達に人気があることを、自分でもうすうす感じていたからであつた。

「どんな相談かしら——？」と、とみ子は、手紙の内容をのぞきたそうに言つた。

「さあ。あとで教えるけど……、一応はあの子のために秘密を守つてやらないと……」

のぶ子はよつぽど手紙を開こうとしたが、それをしてはいけないのだと心の中で囁く声がするようで、行雄の手紙を靴の中にしまいこんだ。

「べつに……私、聞かせていただかなくたつていいわ。たぶん、家庭的なことなのよ……」と、とみ子はツンとした調子で言つた。

間もなく、K 駅についた二人は、上り下りのホームに分れて電車を待つた。ベンチに腰を下ろしていると、爽やかな初夏の微風が、線路をつたつて吹き通つていった。のぶ子は、膝にのせた靴のことが、しよつちゆう気にかかつていた。まるで中に宝物でも入つてゐるかのよう——。

それというのは、のぶ子は、大和田行雄を、ふだんから好ましい学生だと思つていたからである。背が高く、足がまつすぐで、格好のいい身体つきをしている行雄は、色が白いくせに、眉も目もくろぐろとした男らしい顔立をしており、ガツガツ勉強する風もないのにいつも上位

の成績をしめていた。文学が好きで、よく本を読んでいるらしく、のぶ子が受けもつてゐる国語の時間に、文学的な教材が出てくると、行雄は高校三年生の常識をこえた教養を示していた。

そういう大和田行雄を、のぶ子は、教師と学生というワクを外して、弟のように自由に気兼ねなく可愛がれたら……と考えたりしたこともあつた。

下宿の二階に帰ると、のぶ子は、季節にしては少し厚ぼつたいウールの緑の上衣を疊に脱ぎすて、縁側の籐椅子とういすに腰を下し、両足を小卓の上にのせて、行雄の手紙を読んだ。ゆとりのあるハッキリした書体で、手紙にはこう書かれてあつた。

僕は貴女を愛しております。こんな手紙を書かずにはいられなくなつたほど、強く強く貴女を愛しているのです。

僕の気持はまったく純粹です。僕が貴女よりもずっと年下であることも、貴女が教師で僕が学生であることも、僕が貴女を愛する気持に少しも水をさすものではありません。

のぶ子さん、貴女はいつか授業中に恋愛の話が出た時、男女の結びつきに当つて、女の年齢や処女性等に強くこだわるのは、女性の人権が十分に尊重されておらず、見合結婚の場合の、人間を形式で律する考え方が残つてゐるせいだと言いましたが、僕はいま、僕の現在の立場で、貴女の言葉が眞実であることに深い共鳴を覚えてゐるのです。

すこし茶色をおびた陰影のある貴女の目。人の心をそるように白くピンと反つた貴女の鼻。接吻のためにいつでも開く用意があるのかと思われる柔かく結んだ貴女のうす赤い唇。ムシャムシャ食べてしまいたくなるような桜色の厚ぼつたい耳。黒い豊かな髪の毛のうねり。ふつくらした顎。抱き心地のよさそうなスッキリした身体つき。貴女のはいつも僕の血の細胞の中に、感覚的にいきいきとおどつています。

のぶ子さん。僕の愛情を受け入れてくれませんか。これ以上じつとしていると、僕の愛情は内証して、僕を窒息させてしまふにちがいません。僕は貴女を抱きたいのです。熱い愛の言葉を噴泉のように貴女の耳に注ぎかけたいのです。そして、貴女からもそれに酬いてもらいたいのです。

念のために申しますが、僕は貴女と結婚しようとは考えておりません。そういうありふれた契約で、貴女や僕自身の自由を束縛するのは愚かなことだし、愛情の純粋性を傷つけることだと思ふのです。

では、のぶ子さん。どんな形のものであれ、貴女の御返事を待つております。砂漠で喉が渴かわいている人間のように――。

河合のぶ子様 みもとへ

大和田行雄

(みもとへ——だつて。まあ！……まあ！……)

のぶ子は、手紙の一番しまいの言葉を口の中でつぶやいて、虚をつかれたようにあわてている自分をしめようとした。ばかばかしいような、ひどく滑稽こけなような、ひどく嚴肅なような……どれが自分のほんとの氣持なのか、自分にもつかめなかつた。こんな時は、思いきつて自分を單純化してみるのだ。すると、ともかく自分は人から好意を寄せられているのだから、この手紙を読んで喜んだとしても、疚やましいことではないであらう。しかし、先方は好意以上のもの、愛情を訴えかけているのだ。それなのに、自分が、そう不快にも感じないのは、ふだんから相手を好ましい少年だと思つていたからにちがいない。

いや、もしかすると、大和田行雄は、自分のそういう氣持を敏感に嗅ぎつけていて、その結果、この手紙を書く氣になつたのかも知れないのだ。こんなに自分を慕う彼が、もし小学生だつたら、膝の上に抱え上げて「可愛い可愛い」と愛撫あいぶしてやればいいのだが、現実の大和田行雄は、教え子ではあるが身長五尺七、八寸。その氣になれば女に子供を生ませることも出来る若者なのだ。そこに、彼の手紙の言葉で言えば、自分が「純粹」な氣持で彼の訴えをとり上げるわけにはいかない理由があるのだ……。

のぶ子は、二度三度と手紙を繰り返して読んだ。まことに卒直に書いてあつて、いじけた所やためらつた所が少しもない。書かれた分だけの氣持が汲みとれて、裏側に根をふかく張つてゐるものは感じられない。真面目まじめかと言えば真面目にちがいないが、しかし重苦しくはなかつ

た。ただ、全体にアンバランスな調子があり、それがのぶ子を、あるいは涙ぐましい、あるいは吹き出したようなチグハグな気持にさせる。

そして、そのアンバランスな感じが何から来るのか、こう相手にふところのまん中にとびこまれてしまうと、のぶ子には見当がつかなくなってしまうのだつた。

(たぶん、なんでもないことなんだわ。むかし、女学生が若い男の教師にお熱を上げたように、いまはそれを逆にした現象が出来ただけのことだわ。ムキになるほどのことではない……)

そんな風に割りきつてみたりしたが、大和田行雄の青つぼくハンスムな容姿が脳裏にこびりついて、のぶ子の感覚をあやしくくすぐつた。そして、

(もしかすると、この手紙は、私の生活をシンから揺り動かす糸口になるかも知れない……)と、身体の奥にかすかな戦慄を覚えたりした……。

夜になつた。下宿の人達は、のぶ子に留守を頼んで、親子四人で親戚の法事に出かけて行つた。客用の丸テーブルにもたれて、文芸雑誌の小説を拾い読みしていると、七時半ごろ、玄関の呼鈴の音がして、

「今晚は——」という声が聞えた。

若々しい調子の声なので、もしかすると大和田行雄かも知れないと、のぶ子の胸はときめいた。

「どなた？」

「僕です。大和田です……」

（やつぱりそうだったわ……）

のぶ子が玄關のガラス戸をあけると、昼間会つた時のように、グレーのウールの半袖のシャツに、折目のついた紺のズボンを穿いた行雄が、緊張した微笑を湛えて、敷居につかえそうにヌウと突つ立つていた。

「下の人がみんなお出かけになつて、私ひとり留守居をしていたの。……お入りになる？」

「ええ、上らせてもらいます」

「どうぞ——。足はきれいになつてゐるんでしょうね」

「新しい靴下をはいて来ました」

のぶ子は行雄を二階に案内し、鎌倉彫りの丸テーブルを隔てて、向き合つて坐つた。縁側の障子はわざと開け放してあり、そこからヒンヤリした夜気が流れこみ、街の青い月夜の景色がじかに望まれた。

行雄は長い脛をもてあましたように、あぐらにしたり正座にしたり、もじもじしながら、丸めた半巾でしきりに首筋のあたりを拭いていた。視線も落ちつきがなかった。

「大和田さん、気楽になさいな。そして、ゆつくりお話ししましょうよ……」

「はあ。でも、僕、だめなんです。僕、先生が好きなものですから、向き合っていると、息苦しくつて、なんか莫迦げたことをしてかしそうになつてしまふんです。……先生、僕の手紙、

読みましたか」

行雄は無意識に先生と言つてしまつた。のぶ子は柔かい微笑を浮かべて、相手をじいと思つて、

「読みましたわ」

「先生のお気持はどうなんですか」

「あら、もう返事の催促に來たんですか？　気が早いわ。私は何しろびつくりしてしまつて、その驚きがまだしずまらないほどですの。これからゆつくり考へて、御返事しようと思つていましたの。女にとつては大切なことですからね……」

「大切なことですけど、そう考へるひまがいらな**い**ことだと思ひます。イエスカノウか……」  
「まあ、猫の子をもらうんだつて、もつと相手を吟味きんみしますわよ」

「先生も僕も、二年間相手を觀察する暇があつたわけです。……先生、僕を嫌ひですか？」

「嫌いじゃないわ。でも、嫌ひでないからつて、貴方がお手紙で述べてるような愛情を抱いてゐることにはなりませんけど……。貴方はこだわるなと言ふけど、私としては、お互いの身分や年齢のことも考へないわけにいきませんわ。そういう約束の社会の中に生きてるんですから、純粹の氣持だけでやつていくといふことは、いろいろ無理がありますものね……」

「先生は臆病だな。問題が自分のこととなると、急に用心ぶかく保守的になるんですから……」  
「仕方がないわ。私は毎日、貴方を教壇の上から眺めていたんですからね。だからどうしても、

大和田さん、お漢をかみなさい、と言いたくなるような気持ちもたなかつたのよ」

「チェ、侮辱だな。……僕、お希みなら、先生に僕の赤ン坊を生んでいただくことだつて出来るんですぜ」

「まあ、ひどいことを言うのね……」と、のぶ子は口先きではとがめたが、そうイヤらしい気はしなかつた。

行雄の言葉にネットリした実感がこもつていないからだつた。

「じつは私も貴方の手紙をみてから、なるほど、私達の間にはそういう関係も成り立つんだなと考え直していたとこなの。……でも、大和田さんは、いつごろから、私に対してそんな感情を抱くようになったの？」

「ずうと前から……二年越しかな。先生が新任式で講堂の壇の上に立たれた時、隣にいた伊吹の奴が『今度の女先生、ちよつとイカスじゃねえか』と言うんで、僕も注意してみ、すばらしい人だと思つちやつたんです。……先生は男の学生達の間にはとても人気があるんです。先生も感づいてるんでしようけど……」

「どんな人気——？」

「それはね。……男の学生つて、ときどきすげえワイ談をやるんだけど、その対象はいつも先生なんです」

「貴方もその仲間？」

「いえ、僕は先生がワイ談の種にされると、癢に触つてたまらないんです。……でも、心の中  
で思うだけでどうにもならないでいる僕は、仲間が口先きで先生をおもちやにしているのを聞  
いて、胸のモヤモヤをはらしている場合もないではないのです。僕、自分が情けないと思うん  
だけど……」

「行雄さんは正直な人ね。——私についてどんなワイ談をするのか、聞かしてもらえる？」  
「そんなこと出来ませんよ。……まつたくひでえことばかり言うんだから。……先生なんか聞  
いたら卒倒しちゃいますよ」

しかし、のぶ子は、今度も自分が汚されたような気がしなかつた。肉体が清浄なもののワイ  
談は、詩のようなものだからである。

「貴方、カラ唾をのんで……喉が渴くんでしよう。いま、飲み物をもつて来て上げるわね……」  
のぶ子は、階下の冷蔵庫にあずけてあるジュースを、コップに入れて運んで来た。行雄はそ  
れをひと息に飲み干してしまつた。黒い目が強く光り、むき出した両の腕には濃い生毛がはえ  
ており、短くきつた髪が額にバサリと垂れて、男を感じさせる。

「貴方の家はなんでしたっけ？」

「親爺は会社の重役です。おふくろはちよつとした美人で、子供は僕と妹一人と二人ぎりです。  
親爺は女道楽もしないし……まあ、そういう要求を感じさせないほど、母にお色気があるのか  
な。そんなことで家庭円満だから、僕なんか早熟そうじゆくだつたかも知れないんです」